

第 21 回 JAMS 研究大会 個別報告要旨

【報告 1】

「何故、日系企業 R&D 部門は優秀なローカル技術者を採用出来ないのか? : マレーシアでの日系・外資系企業の事例研究から」

岡本義輝 (宇都宮大学)

1) 問題意識 ①

全世界の工場生産するコモディティー商品の製品開発はその大半をマレーシアに移管した。しかし R&D 部門では約 10%の日本人が基本設計と管理を行っており、ローカル化が進んでいない。

2) 分析枠組みと調査結果

②～③の概要を報告した後、④と⑤の要因をアンケートにもとづき分析する (下図参照)。

3) 先行研究

本稿は、Bartlett & Goshal (1989) の多国籍企業 3 類型をベースに「第二極開発センター」を提案している。また藤本 (2004) 「成功する製品開発」に依拠し、マレーシアでの「R&D が成功する」と「R&D の海外移転が成功する」の

違いを論述する。

4) 外資系・日系 R&D の採用政策と処遇の違い

日系と外資系の R&D 技術者の「処遇」(外資系の給与が 1.5 倍位高い)と「採用政策」(優秀な学生に奨学金を与え、彼らを長期間観察して採用する。日系は 1~2 日の面接のみ)に大きな違いがあり、日系 R&D が優秀な技術者を採用できていない。

5) 日系 R&D が上記 4) の違いを何故、改革しないのかの要因分析

第 1 回「ローカル化のメリットあり」、第 2 回「格差ある賃金を導入しないと優秀な技術者は採用出来ない?」の質問にほぼ同意している。しかし第 3 回「格差ある処遇の導入状況」に肯定的な回答は 12.5%で、「総論賛成、各論実行せず」となった。その原因は①本社は R&D の改革を評価しない、②現法社長は保守的で改革をしない、である。



④要因分析: 在マレーシア日系 R&D のローカル化が何故進まないのか

アンケート	第 1 回	第 2 回	第 3 回	第 4 回	第 5 回
質問項目 (要因)	ローカル化のメリットはある	格差ある処遇しないと良い技術者は集まらない	格差ある処遇の導入状況	原因: 本社は改革の評価 ×、現地: 改革に保守的	中央集権的な海外 R&D 統治
技術者賛同	85.0%	96.3%	12.5%		

【報告 2】

「ブルシ運動と 2008 年総選挙以後のマレーシ

ア：活性化する社会運動と市民社会の成長」

伊賀司（神戸大学）

本報告では、選挙制度改革運動であるブルシ（Bersih）に焦点を当て、2008年総選挙後のマレーシアの政治と社会について論じたい。

ブルシは過去3度の大規模なデモを行っている。最初のデモは2007年11月10日である。この時は、3万人から4万人がクアラルンプール市内中心部の各地に集まり、王宮を目指してデモ行進に参加した。2度目のデモは2011年7月9日であり、クアラルンプールでは1万人から2万人とみられるデモ参加者がムルデカ・スタジアムを目指した。3度目のデモは2012年4月28日で、クアラルンプール市内だけでも8万から10万人もの参加者がムルデカ広場周辺に集まった。

2度目のブルシのデモは、ブルシ2.0（Bersih2.0）、3度目のブルシのデモはブルシ3.0（Bersih3.0）と呼ばれており、これらのデモは、クアラルンプール市内だけでなく、マレーシア国内の各都市、さらには在外マレーシア人によって世界の各都市でもデモが行われた。

マレーシアにおいて、数万人規模のデモが頻発するような事態は1990年代末のレフォルマシ運動の時代以降は、しばらく見られなかった。しかし、2008年3月の第12回総選挙の少し前の2007年末頃から5年余りの間に、上記のブルシ運動を筆頭に様々な社会運動が活性化し、街頭でのデモや抗議活動を行うようになっている。

こうした社会運動の活性化の背景には、2008年3月の第12回総選挙で野党が大躍進したことで、BN体制が動揺をきたしていることに原因の一端があることは間違いない。加えて、90

年代半ば以降に急速に発展してきたオンライン・メディアの存在や、35歳以下の若年層が6割を超える人口構成などのマレーシア国内の社会経済的特徴とグローバル化の影響が互いに影響し合って、これまでの政治過程では表出されにくい国民の声を代弁するための手段としての社会運動の汎用性を高め、一般市民の運動への参加を容易にしている面も指摘できる。他方、こうした2008年総選挙後のマレーシアにおける社会運動の活性化は、エスニシティと党派の政治の枠を超えた市民社会の成長を伴っている点も興味深い。

以上を踏まえて、本報告では、急激に変化する2008年総選挙後のマレーシアの政治と社会の姿をブルシを中心とする社会運動の展開というレンズを通して報告したい。報告では、ブルシ2.0を中心にブルシの要求や戦術に主に焦点をあてて議論する一方で、グローバル化および情報化とマレーシアの社会運動との関係、ブルシがマレーシアの政治と社会にどのような影響を与えた（与えつつあるのか）という点についても議論したい。

【報告3】

「資料の保存とその活用化：マレーシア・インドネシアを事例に」

青柳枝里子（穂高書店）

近年、図書館や諸研究所では、蔵書スペースの減少等により大量の基礎資料を紙媒体で保存することが困難になってきている。マイクロフィルムも、長期保存には適するが、湿度や温度の管理など保管には特別の配慮が必要である。また、大量のフィルムのイメージから必要な情報を探すことは、多大な労力を要する。

資料をデジタル化することにより、保存や利用環境が飛躍的に改善されるようになってきた。学内のイントラネットやインターネットを通じて、研究の基礎資料となるデータを共有化することが可能である。資料を手元で閲覧できることで、利便性も向上する。

そして、これらの研究に関わる環境向上の結果として、特に次のような 3 点に集約することができる。

- (1) 研究者・研究機関や現地社会と研究資料を共有する
- (2) 情報技術を用いることで文献資料の新しい分析方法を見出す
- (3) ビックデータを活用して現実社会の諸問題を可視化する

研究の一次資料の活用をサポートする過程で、様々な方法や技術が蓄積されてきた。

本報告では、デジタル化されたマレーシア・インドネシア関連の資料を、検索方法と合わせて紹介する。

マレーシアの資料の特徴の一つとして、ジャウィ文献が存在することが挙げられる。ジャウィ文書は一部改変されたアラビア文字で表記されたマレー語のため、スキャンした画像データを文字として読み取り、OCR 処理することは困難である。

『ジャウィ・プラナカン』（Jawi Peranakan）は、1876 年にシンガポールで刊行されたジャウィの新聞である。キーワード検索を目的に、1 記事単位にタイトル・第一段落・執筆者といった情報を項目別に整理し、PDF の注釈として付加する作業を進めている。より短時間で目的の記事を絞り込むことが可能である。

『カラム』（Qalam）は 1950～1969 年に刊行さ

れたジャウィの月刊誌である。日本の研究者グループの成果をもとに、全文のローマ字翻字プロジェクトが 4 年がかりで進められている。ローマ字版のレイアウトは、ジャウィ版を模して各ページ、1 行ずつ対応している。全文検索が可能のため、例えば、一定の期間に特定の単語が何回出てくるかを調べる、といった方法で資料を分析することも可能であり、上記の(2)の手法を用いることができる。

最後に、『インドネシア自然災害新聞記事データ』について紹介する。インドネシアでは、2004 年のスマトラ島沖地震以来、大規模な自然災害が発生している。大量に収集された新聞記事を有効に活用するために、発行日・誌名・記事タイトル・執筆者・第一段落の内容・地名といった情報を項目別にまとめ、一覧できるリストを作成している。キーワード検索やデータの並べ替えによって必要な情報を抽出し、オリジナルの記事にリンクする形になっている。これによって、上記の(3)に挙げたように、文献の中だけではなく、現実社会の問題について分析結果を提示することが可能となる。

【報告 4】

「タイ＝マレーシア国境の越境者社会：クダー州内部地域のタイ語話者社会と沿岸政権としてのクダースルタン国」

黒田景子（鹿児島大学）

この発表はクダー州のタイ語話者、タイ仏教徒とタイ語話者ムスリム（サムサム）の近年の広域調査に基づく。これにより、前近代にさかのぼる南タイからの移住者と海域政権としてのクダースルタン政権の領域を歴史的に明らかにし、港市国家としてのクダーの姿の再考を促す。

タイ＝マレーの国境は 20 世紀初頭の条約により基本線が決められ、タイ、マレーの双方の国民国家化の進行とともにタイ仏教世界とマレーのイスラーム世界との交流についてあまり注目されてこなかった。

クダーを朝貢国として扱ってきたシャム（タイ）との歴史的関係は権力者同士の政治に関わる歴史記述が中心で、その中ではシャムとクダーの朝貢関係はクダーの朝貢とは「形式的な支配」と言われてきた。

クダーの主要な歴史記述は沿岸域を中心とする。それはクダースルタンの支配地域がクダーの沿岸部に集中していたこともある。クダーの沿岸政権は海上では現タイ領のプーケットの南部まで伸長するなどの記録はあるものの、クダーの内陸丘陵地においてどの程度村落を把握していたのかは不明である。

この発表で紹介する調査は、内陸部にマレーシアでもっとも数多くあるタイ寺院 41 カ所を全寺院調査して GPS での位置をマッピングし、資料収集したものである。これによりクダー州内陸のタイ寺院とその近辺に住むタイ語話者ムスリム集団は 300 年以上前から南タイから漸次移住し、それぞれが特徴ある居住地域を作っていたことを明らかにした。

タイ語話者とタイ仏教者はブミプトラではあるが、マイノリティとして長らく政治的にも注目されてこなかった経緯もある。近年マレーシアのタイ人協会はブミプトラとして UMNO との協力関係を勧めている。

またこれは歴史研究としても興味深い考察をもたらす。歴史文献資料の存在しない内陸部において、かくも多くの地域にタイ人村落やサムサムサムの村落が存在しているということは、近代

国境決定以前のクダーとはどのような政権であったのかという歴史認識を改めるきっかけとなり、またこの地域を巡る地政学的なネットワークについて考察を促すものである。